時評

天地狂ふ一日ののちを

大口玲子

東日本大震災から四年目の三月十一日を迎えた。被災地からの移住者として「四年目を迎え、今後の希望について話してください」と地元テレビ局の取材を受け、「希望はない、絶望している」と答えたら「それでも何か希望を」と繰り返し要求され、考え込んでしまった。私の移住は隣県で起きた原発事故が大きな理由だが、移住先でも隣の県に原発があって再稼働の準備をしている。くわえて火山や地震の活動が活発になっていることを考えれば、状況は四年前とそれほど変わっていない。「事故は起こらない」と思っていた震災前より絶望が深い。東日本大震災の被害が甚大で過酷なものであったことは間違いないが、この四年間の政治やマスコミの酷さは、震災による被害の状況そのものを上回りつつあるように感じることさえある。

・〝法案〟が〝法〟と成りゆく晩秋を新生児抱きて新聞を読みき　永田紅

・皐月闇のなかで振られてゆくルビの、交戦権は、これを認めない　吉川宏志

・書棚より今宵手に取る『夜と霧』昭和の版の小さき活字　久慈こうこ

・終電に近き線路を通過する列車は学徒出陣なるか　藤原龍一郎

「歌壇」三月号の特集「アンソロジー二〇一四テーマ別私の一首」の「社会・時事」からの四首。秘密保護法、集団的自衛権の行使容認が慌ただしく決まったことへの不安、違和感がある。そして『夜と霧』「学徒出陣」は単なる懐古ではなく、暗い時代が再び来る（あるいはもう来ている）ことをじわりと感じさせる素材である。

この特集は作者自身が自作とそのテーマを選ぶ仕組みであり、「社会・時事」の作品数はこの三年間増え続けている。二〇一二年の八十七首、二〇一三年の一〇二首に比べ、今回は一一八首。他のテーマでも〈線量計見ないで済むは何か疚し嘘のやうなるやまとまほろば〉（「風土」黒木三千代）のようにあきらかに震災後を詠んだ歌があることを考え合わせると、過酷になりつつある日本の現状が、このアンソロジーにも影響しているのかもしれない。

・フクシマや山河草木鳥獣虫魚砂ひとつぶまで選挙権あれ

この歌は、先にあげた「アンソロジー二〇一四」の「社会・時事」のページに作者が自選した歌で、二月に刊行された水原紫苑の第八歌集『光儀』におさめられている。原発事故による汚染の被害は、人間だけの問題ではない。福島のあらゆる自然も「砂ひとつぶ」にいたるまで放射能汚染の被害者である。居住地を自由に変えられず、共に暮らす人間を自由に選べない彼らこそが、まず人間に絶望しているだろう。

・天地狂ふ一日ののちを愛のみの裸形となれるひとの光儀や

『光儀』巻頭の一首。天地が狂ったように揺れた震災の日以降、私たち人間はあらゆる虚飾を捨て去ることができたのだろうか。「愛のみの裸形」という表現から、心と体をむき出しにして震えている、はかない生き物としての人間の姿が浮かんでくる。